

日本語の主語はなぜ現れにくいのか

——社会文化的要因としての「世間」——

高 橋 道 子

キーワード： 主語、コンテキスト、視点、世間、社会文化

1. はじめに

日本語には英語と比較して主語のない文や発話が多く見られる。発話の文脈や背景からわかる主語は言わないでおくのが普通である。もし言ったらかえって不自然に聞こえてしまう。逆に英語では主語によって動詞の形が決まるので、たとえ主語が指しているものが話し手、聞き手にとって明らかであっても、必ず明示しないと文にならない。英語と比較して日本語に主語が現れにくいのはこの文法特徴のみによるのであろうか。

本稿は日本語の主語が現れにくい要因を、Takahashi (1999) の日英語の主語の出現率の比較をデータとして、社会文化的視点から考察する。Takahashi (1999) は小説の中に現れる人を示す主語について、「語り」と「せりふ」に分け、更に人称別に分けて英語に対応する日本語の主語の出現率を調べた。それによると「語り」より「せりふ」において、又、三人称に比べ、一人称、二人称に主語の出現率が低いことがわかった。なぜなのだろうか。

本稿はその原因を、「せりふ」における発話のコンテキストを見る話し手の視点が英語と日本語では異なっており、それが日本語の主語を現れにくくしており、そのことに日本社会の「世間」がかかわっていることを主張するものである。ここで言う発話のコンテキストとは言語内の文脈のみな

らず、発話にかかわる人、場面、状況、背景など発話に関するあらゆる要素で、話し手、聞き手が共通に分かち持つ要素を言う。

「世間」という言葉は日常多く使用されているにもかかわらず、今まであまり研究されてこなかった。又言語分析に使用されたことはなかった。本稿は、「世間」の枠組みの中での言語使用が日本語の主語の明示化を避けている大きな理由であり、「世間」は主語の問題のみでなく、あらゆる日本語使用の場面にかかわっている可能性のあることを主張する。

2. 先行研究

日本語に主語が現れにくい現象を扱った研究には二つのタイプがあり、一つは日本語に英語と同じように主語があることを前提にして主語の省略について扱ったもので、主なものとして久野(1978)、Shibatani(1990)がある。これらは文単位に主語を扱ったもので、広い意味のコンテキストは考慮されていない。もう一つのタイプは、日本語に主語があることを前提としないもので、森田(1995、1998)は主語を言わない日本人の発想を日本人の文化的視点から眺めた。Uehara(1998)は小説の中の主語の出現率を調べ、日本語の主語は必ずしも必要ではなく、オプションであるとした。金谷(2002)は主述関係を否定する三上(1960)の構文論を支持し、日本語に主語はいらないことを主張した。本稿は後者の立場に立ち、日本語の主語は省略されているのではなく、主語を入れるか入れないかはコンテキストによって発話者が決めるという Takahashi(1999)の主張を支持する。

3. Takahashi(1999)の研究

Takahashi(1999)は川端康成作「伊豆の踊り子」を Seidensticker の英訳と比較し、翻訳の英語にある主語が、オリジナルの日本語の文の中にはどのくらい含まれているか、出現頻度を比べた。表1が英語の主語とそれに対応する日本語の主語の数である。なお、調べた主語は全て人を示すものである。¹

表 1 英語と日本語の主語の数

データ	一人称		二人称		三人称		合計	
	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語
語り	190	90	0	0	218	157	408	247
せりふ	54	6	26	2	51	31	131	39
合計	244	96	26	2	269	188	539	286

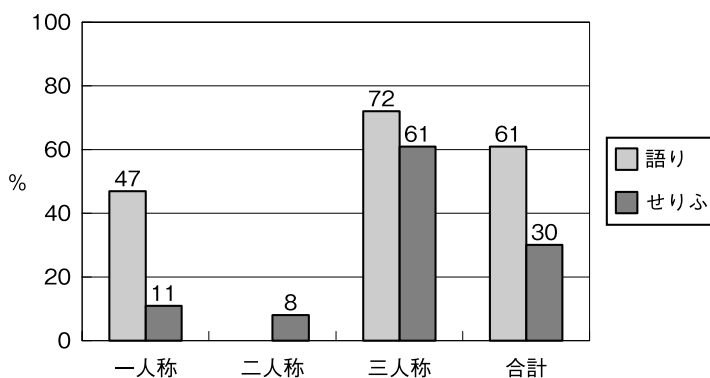


図1 日本語における主語出現率

図1は、表1のデータをもとに英語の主語出現率を100とした場合、日本語の主語の数を百分率で示したものである。

図1によると、「語り」の部分における日本語の主語出現率は一人称が47%、二人称は英語、日本語とも出現していない。三人称は72%である。一方「せりふ」の部分に於ける主語出現率は一人称11%、二人称8%、三人称61%である。以上から見ると、主語の出現率は「語り」より「せりふ」で少なく、人称別にみると一人称と二人称で少ない。特に「せりふ」の一人称、二人称で極めて少ない。それに対して三人称は「語り」72%、「せりふ」61%で、両者に大きな違いはない。以上の結果を通して、Takahashi (1999) は日本語の主語はコンテキストから明らかなきは言う必要がなく、主語の有無はコンテキストに依存している可能性が大きいこと

を主張した。

本稿は、この研究の中の「語り」と「せりふ」、及び人称別の主語出現率の違いの原因について、日本語は主語なしで文が成り立つという文法制約以外に社会文化的な要因があるのではないかと考え、発話者のコンテキストを見る視点に注目した。発話者のコンテキストを見る視点は、日本語の「語り」と「せりふ」では異なり、日本語と英語でも異なることを仮説として、Takahashi (1999) のデータを更に考察する。

4. 考察

4.1. 話し手のコンテキストを見る視点

日本語話者と英語話者の視点の異なりについて、井出 (2003: 10–11) は日本語話者の視点は話の場面の中にあるが、一方、英語話者の視点は場面の外から場面を見渡す位置にあることを指摘している。本稿ではこの視点を基に、日英語のいくつかの例文を取り上げながら「語り」と「せりふ」のコンテキストを話し手の視点から眺めてみる。

4.1.1. 「語り」の場合

「語り」においては、一人称を名乗る主人公のほかに、作者である語り手のもう一人の一人称が存在すると考えられる。すなわち、場面の中に現れる一人称と、この一人称を反射して外から客観的に眺めているもう一人の一人称である。これは日本語でも英語でも同様である。話し手は読者を意識しながらコンテキストの外にいて、客観的な視点でコンテキストの全貌を眺めていると考えられる。すなわち、自己を客観化しているのである。そのため、「語り」の一人称主語の出現率は 47% で、「せりふ」の 11% よりかなり多く出現している。これをもとに、「語り」の場合の話し手のコンテキストを見る視点を図にしたものが、図 2 である。日英語それぞれの楕円は発話のコンテキストを示す。図の中の【1】は一人称、【2】は二人称、【3】は三人称を指す。【1】' はコンテキストの外から客観的にコンテキストを眺めているもう一人の反射した一人称である。²

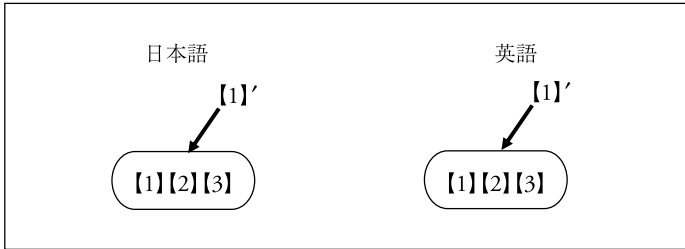


図2 話し手のコンテキストを見る視点—「語り」の場合

「語り」の日本語の一人称の視点は、英語と同様コンテキストの外にあって客観的にコンテキストを見ているので、次の(1J)、(2J)の例のように英語に対応する一人称主語が現れる。例文の番号の隣のJは日本語、Eは英語を指す。例文(1J)(1E)、(2J)(2E)に見る一人称主語は小説の中の主人公であり、そこには作者が反射された形でコンテキストの外にいると考えられる。³

- (1J) 私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。
- (1E) I was nineteen and traveling alone through the Izu Peninsula. My clothes were of the sort students wear, dark kimono, high wooden sandals, a school cap, a book sack over my shoulder.
- (2J) 私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙っていた。
- (2E) I fumbled for tobacco and she handed me the ash tray in front of one of the other women. Still I said nothing.

しかし、次に見るように文脈から明らかな場合は日本語の主語は現れない。(3J)では一人称主語が明示されず、(4J)において二つ目の一人称主語が現れないのは文脈から明らかであり、主語なしで成り立つ日本語の文法特徴によるものと考えられる。(5J)でも文脈から明らかな一人称主語は現

れない。しかし、新情報である三人称主語は明示されている。(6J)でも三人称主語が現れている。これは話し手の一人称がコンテキストの外から三人称を眺め、取り立てているのである。

- (3J) 坂道を走った息切れと驚きとで、(私は)「ありがとう」という言葉が咽にひっかって出なかったのだ。
- (3E) Surprised and out of breath, I could think of nothing more appropriate to say.
- (4J) 大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髪を眺めた。(私は)大島のことをいろいろ訊ねた。
- (4E) I glanced again at those rich mounds of hair, at the little figure all the more romantic now for being from Oshima. I questioned them about the islands.
- (5J) (私たちが)男と一緒に私の部屋に帰っていると、まもなく上の娘が宿の庭にきて菊畑を見ていた。
- (5E) We were back in my room when the older of the two young women came to look at the flowers in the garden.
- (6J) 踊子は十七くらいに見えた。
- (6E) She was perhaps sixteen.

4.1.2. 「せりふ」の場合

せりふ部分は小説の中で設定された状況の中の登場人物同士の発話である。「語り」の一人称の視点は日本語も英語も外にあることを見てきたが、「せりふ」ではどこにあるのだろうか。英語では「せりふ」においても常に主語を明示することから、一人称の視点は「語り」と同様、自分を含む小説の場面を外から客観的に眺めていると考えられる。一人称主語を明示すること自体、自身を客観化しているからである。それに対し、日本語の「せりふ」では、主語の出現率は一人称、二人称においてきわめて少ないことから、「語り」とは異なった視点にあると考えられる。話し手である一人称がコンテキストの中に入り込み、コンテキストの一部となって二人称と共

にいる状況が考えられる。一人称は小説の中の発話者になりきっている。そこでは一人称、二人称は、その場に必ずある要素なので言わなくてもわかるため、主語出現率はきわめて少ない。それに対して三人称の主語出現率は英語と多くは変わらない。コンテキストの外の要素である場合が多いからである。

ここで言うコンテキストとは、1.で述べたように言語内の文脈のみならず、発話にかかわる人、場面、状況、背景など発話に関するあらゆる要素で、話し手、聞き手が共通に分かち持つ要素を言う。そこには一人称、二人称は必ず存在しており、お互いが共通認識を持つ要素であるが、三人称は共通認識のものと、話し手のみの持つ知識とがある。話し手のみの持つ知識はコンテキストの外の要素と考える。「語り」の日英語や「せりふ」の英語のように全貌を客観的に見た視点では、一人称、二人称、三人称は全て同じコンテキストの中に見えるが、発話の場面の中から主観的に三人称を見る時の一人称の視点は異なる。すなわち、既に聞き手と分かち持つ三人称と、外から取り立てて聞き手の意識の中に入れる三人称である。この視点の違いを示したものが図3である。

日本語の「せりふ」では、客観的な立場をとる【1】'ではなく、【1】のみの主観的な世界に入る。従ってコンテキストの中にある一人称、二人称の主語はわかりきった要素であり、あえて述べる必要はない。次の(7J)から(11J)がその例である。ここでは一人称、二人称は全く現れていない。

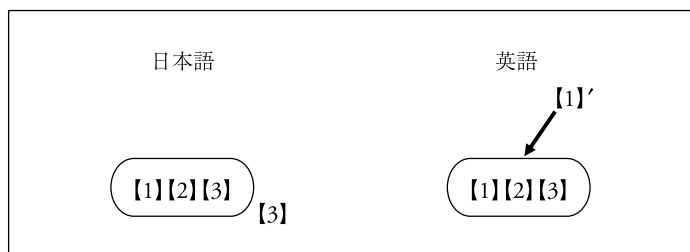


図3 話し手のコンテキストを見る視点—「せりふ」の場合

(7J) 「(あなたは)お足が早いですね。」

(7E) “**You**’re quite a walker.”

(8J) 「(あなたは)甲府へ行ったことありますか」

(8E) “Have **you** ever been to Kofu?”

(9J) (あなたは)聞こえましたか」

(9E) “**You** could hear us?”

(10J) (私は)聞こえましたとも」

(10E) “**I** certainly could.”

(11J) 「勿体のございます。(私は)お粗末いたしました。(私は)お顔をよく覚えて居ります。今度(あなたが)お通りの時に(私は)お礼をいたします。この次もきっと(あなたは)お立ち寄り下さいまし。(私は)お忘れはいたしません」

(11E) “It’s really too much. **I** did nothing for you — but **I**’ll remember, and **I**’ll have something for you when **you** come this way again. **You** will come again, won’t you? **I** won’t forget.”

又、(12J)のように、三人称主語でも話し手、聞き手の共通認識を持ってコンテキストの中にある主語は明示されない。

(12J) 「(彼は)高等学校の学生さんよ」

(12E) “**He**’s a high school boy,”

しかし次に見る(13J)では、三人称は日本語の「せりふ」の中では話し手の意識にあっても聞き手の意識にない要素、すなわち、コンテキストの外にある要素のため、主語が明示される。主語を明示することによりコンテキストの中に入り、聞き手と共通認識を持つようになる。(14J)では、複数の三人称主語があるために、話し手、聞き手にとって共通認識にあるものでも明示しないとわからないので明示されている。

(13J) 「あの芸人は今夜どこで泊まるんでしょう」

(13E) “Where will **they** stay tonight?”

- (14J) 「そうでしたか。あの上の娘が女房ですよ。(彼女は)あなたより一つ下、十九でしてね、(彼女は)旅の空で二度目の子供を早産しちまって、子供は一週間ほどして息が絶えるし、女房はまだ体がしっかりしないんです。あの婆さんは女房の実のおふくろなんです。踊子は私の実の妹ですが」
- (14E) “I’m afraid not. That’s my wife, the older of the two women. She’s a year younger than you. She lost her second baby on the road this summer — it only lived a week — and she isn’t really well yet. The old woman is her mother, and the girl is my sister.”

次は一人称、二人称で明示される主語を見て見よう。(15J) から (17J) では、一人称、二人称が明示されている。なぜだろう。

- (15J) 「それはあなたの思っているより重いわ。」
- (15E) “It’s heavier than you’d think.”
- (16J) 「私はあなたが長岡温泉の人だとばかり思っていましたよ」
- (16E) “I thought you came from the inn at Nagaoka.”
- (17J) 「私も東京は知ってます、(私は)お花見時分に踊りに行って——。(私が)小さい時で(私は)なんにも覚えていません」
- (17E) “I’ve been Tokyo. I went there once to dance, when the cherries were in bloom. I was very little, though, and I don’t remember anything about it.”

ここに明示されている日本語の主語はどれも対比の意味を持っている。これらはあなたと私を対比させ、コンテキストから二つのものを取り出しているのです。一つの主語を明示する必要があるのです。日本語の「せりふ」では、対比の意味を持つ特別の場合以外は、一人称、二人称を言わないのが普通で、言ったらかえって不自然になる。

4.2. 日本人話者の視点

日英語の話し手の視点とその発想の違いについて、森田 (1998) は次の

ように言う。

「英語など多くの外国語は、表現を進める自分自身を対象化して述べる性質があるから、文の中でもいちいち『私は…』と主語を立てて述べていくこととなり、たとえば日本語なら、今、己の目に映る“場面”への疑問として単純に『ここはどこ?』といって済ませるところも、そのつど自身を対象に据えて、『私たちは今どこにいますか』のような言い方をしなければならない。」森田(1998: 13)

「英語のような“己”さえも客体化して第三者的にとらえる視点と、己はあくまで発表している当人自身で、視野の中に「人」として入ってこない日本語では発想そのものが異なっているというべきである。」森田(1998: 34)

この森田のことは、英語の視点はコンテキストの外からコンテキストを客観化して見るという本稿の主張を裏付けていると言える。日本語の「せりふ」のように、一人称がコンテキストの中に入りそこに視点を置くこと、そのコンテキストは客観的に外から眺める【I】’の見るコンテキストとは異なるものだろうか。異なった場所に視点を置いた場合、コンテキストは異なって見えるのであろうか。森田(1995、1998)はコンテキストの中に入った話し手の視点は、自己を取り巻く対象と自己との関係によって意味をなすと言い、日本人の視点について次のように述べる。

「古来、日本人は話者自身を指す『私』の視点で周りの事物や人物をとらえる。常に己との関係で自分を取り巻く対象を把握する。そのような対象とは客観的な存在としての事物ではなく、あくまで自己とどのような関係にあるかによって存在の意味を持つ『私』中心の観念であったといってよい。古代社会においては『私』とは『公』に対する概念で、私(己)の立場から、自己を取り巻く“世間”として『公』すなわち社会をとらえていた。」森田(1998: 26)

「主語とは、話し手が外界から見いだした客観的な対象で、その対象が『なんである』『どんなである』『どうしている』と説明する手段として、言葉に表す文法形式である。しかし、今見てきたように、『私』

を中心に据えて、外界の諸現象を自身の目や心に映る現象として、わが身の側からとらえる発想では、主語は必要ない。」森田 (1995: 55)

ここで述べられている『私』の視点とはコンテクストの中にある視点であり、主観的な一人称の視点であり、そのコンテクストとは『自己を取り巻く“世間”』の中にあるのではないだろうか。「世間」という閉じられた社会体系の中にあるのではないだろうか。それでは「世間」とは何であろうか。

4.3. 「世間」の概念

「世間」という言葉は古い日本の言葉であるが、現在も日常会話の中に頻繁に使われている。ライブドアの堀江貴文前社長は保釈された日に、報道陣の問いかけに「世間をお騒がせし、申し訳ございませんでした。」と答えた。(朝日新聞 2006. 4. 28 朝刊 p. 1) 又、日本銀行の福井俊彦総裁が、批判されているファンドに投資していることが明らかになった時、金融庁幹部は「世間の目がどうなるかもっと考えるべきだった。」と発言した。(朝日新聞 2006. 6. 13 夕刊 p. 1) 又、ヴァイオリニストの千住真理子とインタビュアーとの対話で、インタビュアーは「そうでしょうね、それくらい嫌な目に遭わないと、世間が許しませんよね。」(週刊朝日 2006. 7. 7. p. 65) など、「世間」という言葉は多く使用されている。「広辞苑」を見れば、「世間体を気にする」「世間に顔向けできない」「世間づきあい」「世間知らず」「世間擦れ」「世間並」「世間話」「世間に出る」「世間は広いようで狭い」「渡る世間に鬼はない」など、「世間」という言葉は様々な形で日常茶飯事に使用されている。

これだけ「世間」という言葉が多く使用されていながら、「世間」についての研究はほとんどなされていない。阿部 (2005: 12) は次のように述べる。

「日本人にとっては『世間』の中で生きていることはあまりに自明なことであるために、かえってその『世間』を対象化しようとする姿勢

が生まれなかったのである。『世間』はいわば暗黙の了解事項であり、言葉に出して論すべきものではなかったのである。」

更に、阿部(1995: 16)は「世間」の定義として「個人個人を結ぶ関係の環であり、会則や定款はないが、個人個人を強固な絆で結び付けている。しかし、個人が自分からすすんで世間をつくるわけではない。何となく、自分の位置がそこにあるものとして生きている。」と述べている。また、これを「非言語系の知」と呼び、本来個人がつくる社会を意味している欧米の「社会」とは異なったものであると述べている。(阿部 1995: 27-28)

阿部(2005: 14)は更に「わが国では明治維新以降社会という概念と個人という概念を翻訳語として作り上げたが、わが国には個人が生まれてくる西洋のような背景は存在していなかった。西欧の個人は神という絶対的なものに対して自己を確認しようとする姿勢の中で生まれたのである。」と述べ、『世間』は人が作り上げてゆくものというよりは運命的に存在しているもの、所与として受けとめられていったのである。」と言う。(阿部 2005: 11)

本稿は「世間」の定義を上阿部(1995、2005)によるものとする。欧米の「社会」とは異なる「世間」での発話は、日本語と英語の主語の現れ方の違いにも反映されているのではないだろうか。日本語の「せりふ」の中の一人称主語の視点は、既に置かれたコンテキストの中で相手との関係をつくる視点であり、「世間」という閉じた社会に支配された言語使用である。それに対して、英語は客観的にコンテキストを眺めながら自分自身で作り上げていく「社会」での開いた言語使用を持つのではないだろうか。それが「せりふ」において、日本語と英語における発話者のコンテキストを見る視点の異なりを作っているのではないだろうか。

4.4. ウチ・ソトと「世間」

井出(1995: 57)は「日本人の自己構造は、ウチ / ソト / ヨソの三重構

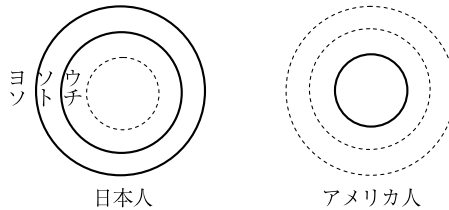


図4 井出(1995)による自己構造の日米比較

造になっていて、それぞれの領域の境界の壁が厚い。これは、どの領域も壁が薄く、自己の周りの殻だけが厚いアメリカ人と大きく異なる点である。」と言い、その違いを図に示した。図4がそれである。

日本語のこのような厚い殻に囲まれた自己構造は「世間」という閉じた社会体系と関連はないだろうか。反対に、自己の殻だけが厚く、ウチ/ソトの区別が点線で描かれるようにはっきりとは別れていないアメリカ人の自己構造は、人が作り上げていく広がりのある「社会」と関連はないだろうか。井出(2006: 62)は、「日本人の日常生活レベルで意識される集団は社会ではなく、世間である。日本人は世間と言う見えない壁の重圧の下に自己を埋没させ、その中で生かされている。」と述べている。更に井出(2006: 63)は次のように述べる。

「世間の基準、つまりわきまえの道を心得た言動が社会的に期待されている。わきまえに準じた行動とは、世間の慣習的な基準に照らして的確に捉えた場における自分の位置、相手や会話の参加者、場面のあらたまり、場の目的等を正しく読みとり、それを言語表現で的確に指し示すことなのである。」

「せりふ」において主語を明示するかどうかは、世間の中において、話し手の位置を知り対話者との関係のもとに決めるのである。発話のコンテキストは世間の中にあるので、世間の求めに応じた言語使用をすることが必要になる。「世間」について更に深く研究して、言語使用とのかかわりを調べることは必要なことではないだろうか。

5. 最後に

英語と比較した日本語の主語出現率は「語り」より「せりふ」で少なく、三人称より一人称、二人称できわめて少ないが、その違いをつくる原因は、主語と動詞で文が成立する英語と主語なしで成立する日本語の文法特徴だけによるものではない。日本語に主語が現れづらいのは、日本語の話し手のコンテクストを見る視点が英語と異なるためである。これは日本語の「語り」と「せりふ」の間でも異なる。「語り」の一人称の視点は日本語も英語もコンテクストの外にあり、客観的にコンテクストの全貌を眺めていると考えられる。一人称主語を明示することは自己を客観化しているからである。一方、「せりふ」においては、主語を明示する英語の一人称の視点は「語り」の場合と同様にコンテクストの外にある。それに対して日本語の「せりふ」においては、一人称の視点はコンテクストの中に入り込んでいると考えられる。その場合、一人称、二人称はコンテクストの中の要素なので、話し手、聞き手にとってわかっているので現れづらくなる。対比の場合以外は現れないのが普通である。一方、三人称については、話し手、聞き手にとって共通認識のあるものは明示されなくともわかるので現れづらくなるが、話し手のみの知識である場合はコンテクストの外の要素となり明示される。

以上のように、日本語の主語が明示されるかどうかは、話し手のコンテクストを見る視点に関係がある。又、コンテクストを構成するものは社会文化的な要素であり、それは日本語の「世間」の概念であり、日本語と英語の発話の視点の違いを作っていると考えられる。「世間」という社会概念は、欧米の「社会」とは異なる閉じた体系を持っており、欧米とは異なった言語行動の要因となっている可能性がある。本稿では日本語と英語の主語出現率の違いの要因を話し手のコンテクストを見る視点の違いからくるものと考え、その原因を「世間」に求めたが、今後、日本社会の根底にある『世間』と欧米の「社会」との違いを明確にして、言語行動との関わりを研究することは価値があることと考える。

註

1 本稿では日本語に主語が現れて英語に現れないケースについては調査していない。そのような場面はきわめてまれであると考えられる。

2 このデータでは「語り」の二人称は出現していないが、小説の作者が読者に語りかける場合も想定できるので二人称もコンテキストの中に入れた。

3 例文の太字下線は明示された主語、日本語の例文の()内は推測できる主語を示す。

参考文献

- 阿部謹也 1995 『「世間」とは何か』 東京：講談社
 —— 2005 『「世間」への旅—西洋中世から日本社会へ』 東京：筑摩書房
 井出祥子 1995 国際化社会における言語と文化とアイデンティティー 『新「ことば」シリーズ1 国際化と日本語』 48–62. 東京：文化庁
 —— 2003 言語研究における文化的視座 『文化・インターアクション・言語』 3–20. 東京：ひつじ書房
 —— 2006 『わきまへの語用論』 東京：大修館書店
 金谷武洋 2002 『日本語に主語はいらない』 東京：講談社
 川端康成 1950 『伊豆の踊子』 東京：新潮社
 Kawabata, Yasunari 1950 *The Izu Dancer*. translated by Edward Seidensticker 1974. Tokyo: Charles E. Tuttle Co.
 久野 暉 1978 『談話の文法』 東京：大修館書店
 三上 章 1960 『象は鼻が長い』 東京：くろしお出版
 森田良行 1995 『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』 東京：創拓社
 —— 1998 『日本人の発想、日本語の表現—「私の」立場がことばを決める』 東京：中央公論社
 Shibatani, Masayoshi 1990 *The languages of Japan*. Cambridge [England]; New York: Cambridge University Press.
 Takahashi, Michiko 1999 Ellipsis of subjects in Japanese: A case study of a Japanese novel in comparison with its English translation. *Proceedings of TACL summer institute of linguistics 1999*. 131–140. Tokyo: Tokyo area circle of linguistics.
 Uehara, Satoshi 1998 Pronoun drop and perspective in Japanese *Japanese/ Korean Linguistics* 7. Noriko Akatsuka, Hajime Hoji, Shoichi Iwasaki, Sung-Ock Sohn and Susan Strauss (eds.) 275–289. Stanford, Calif.: Published for the Stanford Linguistics Association by the Center for the Study of Language and Information.